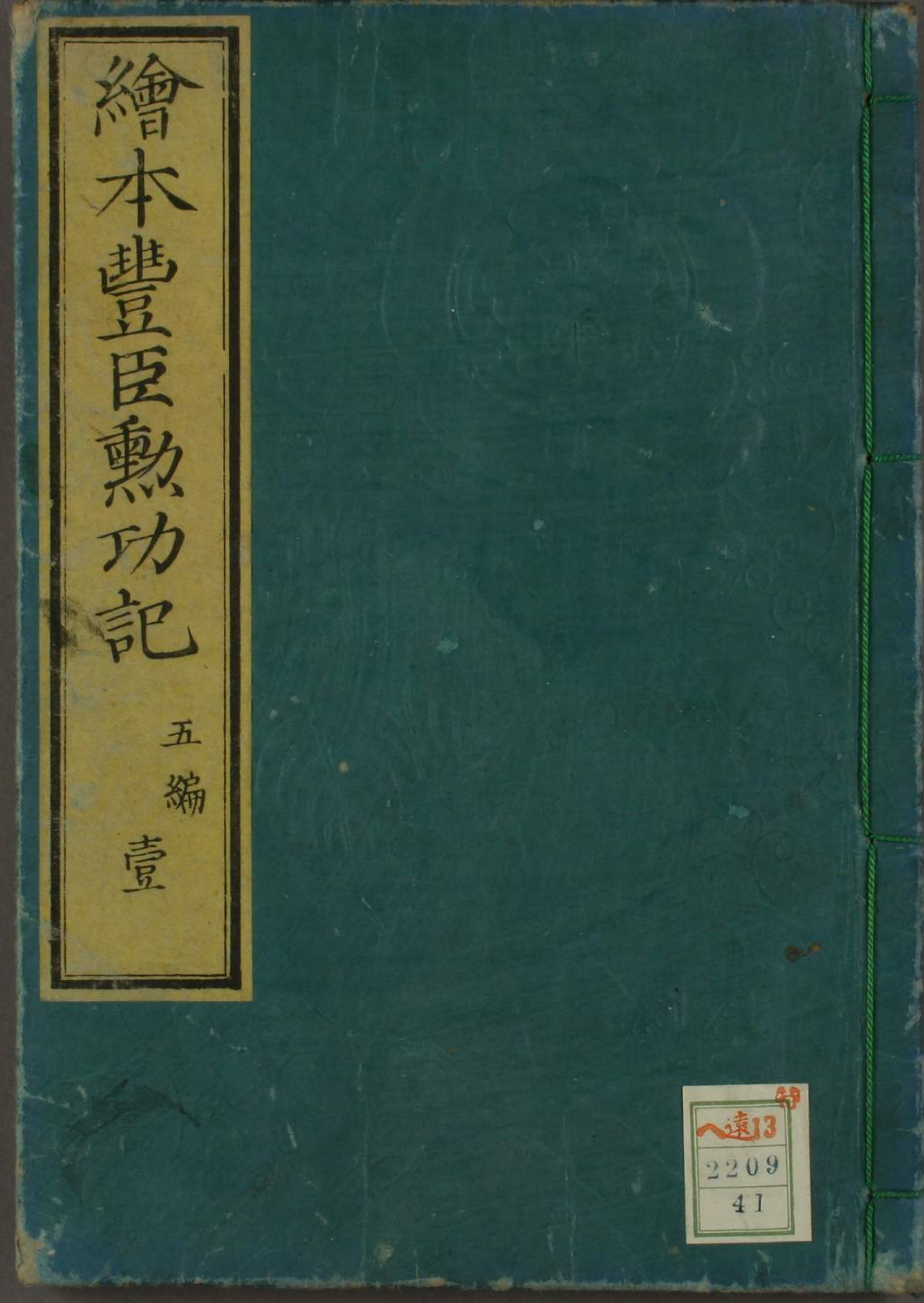


繪本豐臣勲功記

第五編十卷





繪本  
豐臣勲功記

五編  
壹

遠近  
2209  
41





13 遠へ  
 2209  
 41

羽柴筑前守  
 秀吉之像



櫻澤堂山編輯  
 一勇齋國芳畫

花里必閑

繪本豐臣勲功記  
 五編

浪華書肆

群玉堂  
 文海堂



甲斐源氏嫡流武田  
 太郎信勝少年像



甲斐州新太守  
 伊奈源四郎  
 武田勝頼之  
 衰像





右府みぎのふり  
罷臣とろひ  
森蘭丸もりらんまる  
源長恭げんちやうきん  
之像そのがた



織田殿女官おだのとのむすめ  
小侍こざむらい從阿能あのり局まがらひ之驍像そのまう





強位征夷大將軍  
岐源氏明智  
光秀之像



岐阜中將  
織田信忠之像







織田右大臣  
平朝臣信長之像

繪本豊臣勲功記五編卷之壹

目録

秀長ひでなが光秀ひでみつ須す東西とうせい征丹せいたん別べつ

属しゆ光秀ひでみつ欺和きわ

光秀ひでみつ母はは攻陷こうけん八上やじやう城じやう

属しゆ赤井あかゐ由緒よし



脇坂其内使款城况景遠

属 所禳粘皮

赤井景遠約我所毆其内

属 小西使者



繪本豊臣勲功記五編卷之壹

江戸 櫻澤堂山 編輯

秀長先秀頼東征月波属先秀頼和

水珠を懐いし川堀たり。主良々々其邦を分ちらるなり。是小丹

洲八上の城主波多野右衛門大夫秀治といふ者河原。先祖八河志元大

尾魚若公の苗裔同系孫太秀郎の後胤にして波多野次郎義通が

末なり。然る小丹波の一國ハ元弘建武に乱れり。赤井波多野久下

長澤の四家を以て代々國中に割領せしが中頃より細川家の下領

となり。波家長内者波若守元重が後代として執政を爲す。其子の

そだまより。りづくも統く戦國となり。決て云漫里弱く云亡ぶ此ふお

て丹波の四家も漸に武威を振え争ひ。波多野家小良將の事を赤井

八上多和  
那小在く  
藤山に藤





長澤久下の三將もろそが旗下に七属したる。頼小内を推整し、一  
 通小一國を領領し、お領をそそく。東波多野と號し、八上の城に在位し、  
 これを大將家と尊称し、庶流をりりく。西波多野と一、氷上の城に居  
 住せり。是を當して副將と名。然る小天文末の頃、八上波多野と然る、小家  
 督を死せしむ。一族波多野秀行が二男、子熊丸と春丸。八上の家成  
 相續せし。又服させ、右邊の大夫秀治と號せたり。此秀治は同族  
 の妹二個あり、一個は當國保津の城主赤井、孫若門系遠の妻とる  
 り。一個は播磨三木城を別、小三郎長治が妻たり。又秀治の弟遠  
 即ち秀尚を龜山の城に居らしむ。躬の如く一族親類一國のうち、に  
 割據して、各信義を失くし、漆膠和平演められた。信長公先年  
 より、度々降服せしめ、八上とまきととも、遂小一度も上洛せし。賸毛利

一、保津の妻  
 田部より  
 一、保津の妻  
 一、保津の妻

小随順して、織田家に就の意と願し、別長治と謀合せく。既に大志  
 を改企たり。是小依く信長公去る天文二年の秋、越前一揆を退治の  
 後、惟任日向光秀をりりく。丹波心伐の部將とせしむ。然りし小光  
 秀、丹波山城の掾あり。大井川をうら、涉里礼務をること。遭ひ、これとも  
 波多野の一族、更小怖まじ。然る、小去年、冬、丹波但馬の國人、波  
 多野を肖ひく、謀及し、たれを、これ攻めんと。波多野出陣し、一、虚  
 り、成、困ひ、時を宜け、と、惟任光秀、澁川一、益長、長藤、孝俊の加勢  
 と、得く、屯地、又、丹波、一、孔、入、一、龜山、の城、小、推、進、遂、小、城、主、遠、に、光、尚  
 と、進、出、一、先、秀、遠、地、小、在、城、一、七、漸、と、威、勢、成、得、たり、久、今、七、波、多、野  
 滅亡盡せん、と、天文六年四月十日、波多野が旗下、志本山城、行重が、頼  
 守たる、出雲の城、小、推、進、て、烈火の像、人、攻、起、る、中、に、も、明、智、平、二、光、春、



死憤を發して血戦を遂ふ水の渚を新載し六山城を率據して城  
 を閉ひて降参はこれふらう日向共其趣安去城へ委細小言林した  
 てま川れ信長公感収ましく就中光春が忠我神妙なりと所威のお  
 まりた馬分ふらうとさる光秀光春面目を施し光秀も亦収の  
 あまり後の一字を改めさせ平二光春を明智た馬分光俊と号らせ  
 つまらうと次郎光忠をも改名して治右衛門と称せたり其の周羽柴  
 菟原光秀の同年四月十二日安土殿の所加勢と得る菴邊なるま  
 と秋比曉之慈心と云ふ山あかく諸勢を進ませ諸地を撰んて陣  
 を結をせ秋小猛威を又せたりなる响は大将信忠公攻蒐らんと指揮  
 せし多ふを秀吉堅く制止し返しを只城兵を怖しおる程なく自  
 滅はらまらうとんお初まて自軍の威を視せつけかば苗境小の氣換し

かろび目今心願を燃むる丹羽城の秋徒なり波多野赤井倭法威  
 けしと恐る光秀が隊小餘溢らん遠方より西丹波へ隊番廿人小  
 使直より所檢使命属らるる小長が兵を隊分してま川丹西より  
 攻着まらうと夫丹羽の軍理をもて破これ破考らふ波多野人將家  
 親らう赤井の族勇猛なりそが久まらう毛利の一家これを恥けて  
 戦ふ光秀一個の奮力をとて轟轟かんことおもひも寄らば然とせ  
 を意本も勢威まらうそののまらう紀州の一揆松州石山本頼奇  
 と通し合せ丹波勢を導ふらうと愛宕山より洛中へ批投を講じ  
 紀大率紀里ぬらう右にもたふも毛利家の丹波へ出陣せざるうら  
 那別成平治せむ人をめらうと東松小信忠公遠小こを派派引あ  
 里慈ら六平まつ帰洛して伊丹境の衛兵を堅く丹波へ加勢を下



志願し之。一應系都一還らせり。又信長ははくひ成りて秀吉  
 此松を傳言しるる。右大臣に由發ふりておがされ。伊丹境を堅く衛  
 らせ。所検使としし丹州へ向らしり。個々に織田上総介信色簡丹  
 大和掾順慶。極久吉郎秀政。候。そのつ痛生不破。蜂屋。流。は。南。方  
 より。人。教。を。り。張。出。さ。く。所。指。標。れ。ご。ろ。月。日。遠。勢。を。り。播  
 州へ下向らしり。め嘗たま。播州。結。勢。の。之。田。に。り。惟。任。ふ。郎。左。衛。門  
 長。秀。池。田。勝。三。郎。信。輝。塩。川。伯。耆。吉。中。川。瀨。兵。衛。高。山。右。近。傳。に。余  
 せ。れ。日。向。ち。れ。力。を。勅。せ。本。丹。波。を。征。服。せ。り。又。も。龍。希。守。秀。右。衛。門  
 丹。波。を。征。め。んと。欲。せ。り。之。も。之。本。境。も。虚。が。さ。る。を。舍。才。小。市。市。秀  
 長。を。大。將。と。し。脇。坂。甚。内。安。治。中。村。孫。平。次。一。氏。稻。谷。助。右。衛。門。長。則。加  
 孫。孫。六。嘉。明。を。相。副。と。の。勢。二。子。有。餘。人。その。つ。丹。波。但。馬。攝。磨。行。隊

人八百餘人を導令として。織田上総介を衛護し。り。た。ひ。竹。を。も。列。衣  
 が。像。く。西。丹。波。へ。入。せ。り。波。多。野。を。殿。頭。宗。長。の。旗。下。長。澤。内。記  
 久。下。孫。六。郎。傳。別。強。ま。く。出。費。して。遮。り。所。を。と。り。さ。り。さ。り。も。秀。長。自  
 勢。代。指。揮。し。之。猛。威。を。奮。ひ。証。記。を。れ。久。下。長。澤。傳。た。ら。ま。り。破  
 れ。つ。一。將。と。も。に。戦。頭。に。さ。る。ふ。り。て。相。柴。勢。と。ら。ま。り。團。中。一。殺。投  
 り。氷。上。の。城。推。進。人。と。軍。儀。を。小。整。す。と。ら。に。波。多。野。宗。長。の  
 嫡。子。孫。六。郎。宗。貞。傑。氣。の。勇。に。怒。り。張。費。し。上。方。勢。を。追。散。さ。ん  
 と。二。千。餘。騎。は。く。八。幡。山。嶽。を。撃。て。突。憤。虎。怒。龍。の。氣。を。め。り。し。  
 進。軍。の。案。内。者。小。野。本。雅。樂。頭。小。田。垣。但。馬。吉。神。右。衛。門。長。則。を。羽  
 類。し。終。ふ。二。人。が。首。擧。奪。ひ。進。軍。の。二。陣。小。突。蒐。ふ。相。柴。秀。長。が。二  
 番。隊。へ。加。る。孫。六。郎。坂。甚。内。稻。谷。助。右。衛。門。傳。頭。賀。小。六。傳。一。騎。苗。千

豊臣記五編卷之二

三





波多野宗貞  
 傑氣を振る  
 加藤峰須  
 賀脇坂  
 倭と八幡  
 山小戦ふ

豊臣巴五編卷六



豊臣巴五編卷六

四



此勇士軍捷驕る波多野勢へ津潮の像く殺奔しなれば西軍  
 の奪威山門林野も震動するなりはく小刻の挑闘ひし加茂原  
 賀脇坂ゆふいそが猪を殺すに宗貞もつらひ孫長に搦れど自兵大  
 才損亡しと協ひつて見えたるなりふ。當天の暮る伐退足に  
 八幡山へ退たりしが徒兵我ふ氣危むけを影すの防戦なりがごと  
 くに氷上へ率退く遠よあいく羽柴秀長頼て秀吉が授ける謀計を  
 おこるす。次第に國民を招衆せし老人あるひの婦童兒杖弱輩を  
 憐れ別けおろし此金銀を獻与一健固ある族類ハ案内者として軍  
 事に用ひ治國安穩の利を謀とふと百姓都て歎び合我も嗚もと  
 走來り軍場の役伐助るも河重一揆を起して波多野の城下に乳坊  
 とるも多うりたるゆゑ秀長得たりと悦意同とく六月十六日萩野の

城下推進あら成系取一番務也城主萩野彦六郎九郎朝通を撃捕あり。  
 首へか後孫六郎波多野宗長これと所より英作と宗貞も員教を授け之と  
 賊系吉が加勢とん茲とも波多野家此滅する胸と覚悟しなれば二百許  
 の小勢をとりて英く一戦あり賊系守と一齊に自殺を遂て殺  
 たりたる。進兵由とく號ふ渡之之下の城を走地ふ系授り。然し  
 氷上へ推進る宗長もまた時運を奪断。胆挫裂く獲よりなれを旬  
 を経ぬ際小西丹波合悉く平一なり。遠駒惟任日向吉秀秀ハ宗丹  
 波を征伐せん。龜山はより響ひたる。頼く丹羽ハ秀吉が多年當國  
 此厥守としく。波多野を殺め赤井長澤を領代たる歎みれば他人  
 助軍さへ廢さあしぬを目前秀吉が隊をとりて西丹波の地を攻取ら  
 走勢をうり平均せしきくハ秀吉他年の軍勢も一時小空しく歎んで









光秀  
謀計  
波多野  
兄弟を  
活捉





一機手と投着くれ。四方の戸障紙弛放し。露出たる夥の力士。こ  
ま方らんと競蒐り。面筋小兄弟を擒入んと。秀治秀尚心得たりと。  
ち刀脱律と近進軍を。左右小権起砍削し。當る後圓と憤殺を。然  
ども多勢に款し。かく。數箇而小瘻を被り。十字路小索を被り  
まじり。徒者十人も活捉ふして。安去の城へ送らる。是六月八日城  
兵これと所光秀が。不為を大不悟。主人の安危いり。ふやと。款れ踐踏  
を窺ひ在たり。借光秀の。人質の老母を款より。拈返さ。へ不孝。大罪  
に碑の。徽榜。按れ。に。万望。老母を捉返さん。とい。ゆる。計。整。れ。ども。城  
兵。嘗。く。その。形。ふ。ま。る。に。主人の。兄弟。を。素の。如く。帰し。ま。る。に。老人。を  
も。連。與。る。に。ふ。と。呼。り。り。る。あ。る。を。光。秀。目。次。に。殺。さ。る。安。去。使。者  
を。當。登。り。波。多。野。兄弟。が。死刑。を。り。て。替。り。所。寛。宥。み。り。る。と。訴。へ

ける。信長。所。し。め。され。波。多。野。兄弟。が。律。不。於。る。罪。名。既。決。し。た  
里。と。く。終。ふ。誅。戮。せ。し。ま。る。に。城。兵。これ。を。恥。し。り。或。ハ。哭。さ。或。ハ。腹。を  
主人。毆。ま。る。に。い。へ。俺。們。の。月。まで。存。命。ま。さ。人。質。あり。ども。頑。殺  
し。主人の。憤。恨。を。慰。せん。の。と。城。兵。四。十。寨。樓。を。登。り。進。ま。に。東。に  
伺。り。と。恥。し。り。光。秀。潛。ふ。款。び。又。ハ。降。参。ま。る。あ。る。と。急。ぎ。城。下。に  
到。り。り。り。城。兵。これ。を。着。り。り。も。寨。樓。の。射。窓。を。推。開。し。且。ハ。罵  
り。且。ハ。怒。り。叫。ん。ど。光。秀。に。う。ち。射。ひ。汝。俺。們。を。款。さ。て。主。君。あり。る  
所。見。せ。れ。所。命。に。別。條。せ。ら。れ。ど。妄。言。致。し。た。謀。る。と。偽。り。り。り。快  
知。ぬ。ま。さ。と。偶。や。と。今。日。ま。さ。と。試。量。せ。し。小。兄弟。衆。を。誅。せ。し。律。を。も。分。明  
に。恥。し。り。故。不。俺。們。自。害。し。て。主人の。蹟。を。追。慕。せん。と。い。光。秀。より  
送り。人。質。受。領。や。り。と。呼。り。り。光。秀。を。擊。起。寨。樓。に。登。せ。り。り。り。



八上の城兵  
憤怒  
光秀の老母を  
殺す

豊臣五郎左衛門



豊臣五郎左衛門



組手に拾揚斯して返を受領之謂際も何れせし光秀が老母を捕へて逆倒に手捕足捉吊揚二個の兵士が太刀制練め頑刺ぐ其赤小死骸を下(抛擲)一其に同聲に嗤やう。光秀も是を看るよりも氣も魂も消滅る如く狂激音之悲嘆一々るが氣を翻して大ふ怒り大奮挙て自體に指揮あり。斯の城中へ攻投之を二を三に突殺しつもまが城下ある老母の死骸を楯板ふせせと扛入させ信く去士依懸すして單獨急攻させたり。頑く覚悟の城兵輩も忿怒の戈戟を拒防ふ術なく逆小面圍を穿破らる。城兵一個も残るなく生阿る室へ刺さると數を盡して斬殺ぬ。原は老母の老母が実母にあり叔父と庫領之安の妻にたる物光後の実母あり光秀初昔より長育させ母なれを恩愛最も大なり故に殺すまうとこれを安かりし然るに過日安去(預ふ)波多野兄弟此謀殺を延忍くごころを成に般に新京たりしかども信長義謀しむるを見分を誅しむひくは光秀大ふこれ

れを怨之。俵板れ萌生を結びたり。斯の光秀年来の久款波多野兄弟謀殺しく八上の城を奪ふといひども赤小一方の強敵あり同國保津の城主赤井愿右衛門系遠といふ大力を雙の猛將あり波多野秀治が妹婿に。奥丹波を堅めたりしが國中の諸士今も負を賜して明智に随ひ。款するまもるさふ赤小赤井系遠只一個居る色なく軍城せり。是に依く惟任光秀六月十六日せり。保津の城へ推進たり。然ども遠城強をれを經攻に攻ること既小一向を過さども落城を危き氣色もあらず。増てや炎暑に困めりさく強攻強をられ遠遣へ一急退軍を遣しと諸兵を繰めり率退さ同く八月下の日暮び龜山を進發して奥丹波一強嚮ふ。遠响羽柴秀吉より。惟任光秀へ加勢として。五百餘人の軍兵に脇坂基内を大将と。丹波境へ當遣は統率と。其意は遠頃赤井



要右衛門 痛に犯され起居安らげありける。後同者より快所出  
 たる也。然に遠圖不索して推進す。丹波の地不平均あらんと謀殺す  
 脇坂を加勢と稱し遣はたり。こま不固く日向の勢威を以て保津へ推  
 進せ。喊を作り響を響を軍威を示し試せざる不。城兵叛に劣らば  
 防索し。猶も屈せば一戦と看し之。螺鼓搦鳴し推發し。遠を詮途と  
 戦ふ。然に脇坂甚内精しく視る。斯て六力戦を益せりと。先秀にうち  
 驚ひ。城兵をりく降参さるんに軍勢を退せりと。初を檢に由同意す。  
 中つ軍を白立下退せし。誰を使者に遣はさるや。ついで甚内右に  
 登る。乃夫往く。糸遠と帰伏させんと望む。乃を先秀これぞ  
 一々。高嶺より一決す。脇坂安治只一個走地不敵城へ逃たり。丹  
 遠赤井 要右衛門が家緒を精しく詰る。素原村上源氏に。枝赤丹

別に散在し。掃部頭頼季七代の南裔。赤井後太系。廣同次郎系。魁兄  
 才源九系。義経に隨逐し。一の若小勲功せし。乃後太へ逐し。枝赤守教  
 経が子に戦死し。才次郎の判官を供し。奥羽まで下里安宅の園。小て  
 義経に代換し。忠死を遂たり。其後右幕下兄後を。二男を。つて家  
 督を續せ。丹州船井郡を賜り。赤井後太系。系真と稱し。従来八  
 代相續し。赤井系次郎。系忠。八百夫不當の勇士ありし。是利等  
 持院殿。丹州葛山津着陣のまをり。乃一番に此着ゆ。つて西國までも  
 馳身せり。其忠功を。所感あり。乃領加増す。乃。丹波才圓を。褒賜  
 ある。遠駒刑部に任ぜられ。威を國中。振ひたり。當日系忠。遊獵し  
 て。大江山。不投ける。機舎より。獲物多かり。乃。乃。流徒。以。執獲す。捕  
 山深。と。特起る。乃。當ある。巖の洞窟より。視。熱。乃。獸物。出。たり。其



赤井景忠

大江山小

狩

二頭の

老貂を

獲





色赤く福ふして形模馳小像たきども林長にこと又た小餘れり。是  
 いふある歎ふや。推染そは号を徹る室中。木末崇根の嫌ひあく。  
 幽蹠ること狢猴の像く。勿く擒獲ことめし。久騰猛氣の刑部系  
 忠。これを視るより形のみり後。先我弓此巻を露せんと馬よみさ  
 に頭具の蕪根翁拵く。心さ搭ひ。砲地放て。天响して矢的に中を  
 と歎の渾身鐵石よりも牢固にや。鉄碎けく花込ふ了。得此系忠  
 發るこみ。垂着を搭ふく射着るふ。その美も當らぐ花あたり。主從  
 こまに謀断試しつ。先連上りも捨にせんと。刑部馬より蹠で却り。攻率  
 小指揮し。四方を圍込せ。彼猛獸を近く追進せ。巨礮を起らげく  
 を頭と樓抱止。臂力に信せく。扱る遠大に彼猛獸首足を自由  
 に初く得られ。系忠逆小教伏く。短刀刃を割。喉の河より後勿頭

擲小刺るる窮而はや當る人。歎ハ呻と一掃して。鮮血混くと漏出せり。  
 又もらと愛られ。適さどと力に信せく。戰徹し。逆小歎を刺止たり。浩ると  
 ち後。亦一頭寸を遠く猛獸の方僅殺され。る歎を。慕る相小料  
 集り。歎小果し。聲成幾し。叫ねる。跑速る。刑部系忠。眈と視く。  
 又も。雌雄とわやえ。り。遠敵も活く安。か。と窮而。既小知得られ  
 ば。小矢搭へ。能引く。放て。現的。誤過た。首筋下に。馬殺と。る。痛幸  
 に堪。く。倒る。張。系忠。走倚。り。刺徹し。希有。は。も。保。る。物。を。獲。り。  
 呼。嬉。し。也。と。雀。躍。し。法。二。頭。を。駛。率。小。扛。擔。を。色。日。の。暮。る。刻。既。瑠。城  
 り。る。然。る。小。當。夕。刑。部。が。愛。想。よ。二。頭。の。歎。枕。を。に。現。表。り。これ。ら  
 大。に。山。小。教。百。年。を。歴。する。粘。り。し。が。貴。人。の。勇。猛。小。歎。し。ご。く。今日  
 遂に害せし。またり。然とも。雌雄。毎。一。死。を。遂。し。れば。遠。安。婆。に。殘。る





景忠夢中  
老翁の告を得て

赤井家の

長久を

うけ





怨い更にや。唯頼るふくれぐ。雙の首を擡頭す。葬らるる。骸は永く  
 遠世に留止て。所家の實より。まあせ。武運成護。大災を除く。頼  
 頼る遠縁ありと。諾るよと見。夏に醒て。曉色窓に曉く。景忠を  
 れかりいせり。教指の如く。雌雄此首を擡頭す。城の乾に瘞め。數十  
 個の僧を請待か。大般若經を讀誦する。最懇ふと吊ひ。其  
 骸は其の糸に庭の傍へ弃置たり。いづの口はも朽蝕く。肉は腐くと  
 脱却し。其長四尺有餘ありて。宛然華財囊に髻髻する。刀金  
 にも挿しぬ。孫若かりと。京忠をい。遠年囊小刀。劍を納む。孫重  
 せり。其より以来。赤井家の念持。富業。武光。月々に盛まること。孫の  
 加護にや。ありぬ。頼る。遠系忠より。連綿と。孫六代を相續む。  
 赤井右系。右史家。清く。丹波之郡。氷上。天田。に領主として。威勢昔

日小督ら。波多野上。信介。通晴。遠國を領し。より。通小懇切  
 を通し。合上。信介。息女をり。右京を室とす。是に好親を厚し  
 て。稱徳を望む。や。不幸少く。早世に。最期小陳て。舍れ。赤  
 井。忠右衛門。小遺言か。幼子と。二の船の車を付属し。寂然として。没し  
 たり。其右系。遠波。多野。秀治。が妹を娶く。氷上天田の二郡を譲る。交  
 情い。味わ。丹波一國。法盛なり。遠遭。織田家に攻過ら。ま  
 一門。悉く滅亡。保津の城の。孫ふ。か。んで。城主。系遠。疔の腫瘍  
 に悩ま。身。體。全。く。衰。れ。れ。大。勇。猛。氣。の。勇。右。衛。門。此。も。弱。る。氣  
 を。見。せ。ば。猶。後。を。懸。り。て。一。戦。を。論。決。し。戦。死。す。ん。と  
 禪。ら。ふ。と。後。へ。款。陣。より。の。使。者。と。して。脇。坂。甚。肉。未。ま。る。よ。う。奏。者。若  
 を。聆。り。も。系。遠。不。款。の。丈。夫。み。れ。を。快。對。面。して。得。さ。る。と。地







なまご乃夫も侍大將の二個小加より信義を重人へ倭邪を合すは  
是に依る言治小絶せだ吾心中に信義をりて是下の覚悟を考ふ重  
心許るに事ごと多かれ目今波多野家滅亡の期小臨之信義を  
達く共小滅ぶる是誠の信義に何れ其不謂い人とはを推し赤井  
ハ素より當國の舊家波多野ハ晩年の家にして志うも君臣といふ  
あつた些小なる肉縁何るのそ其を波多野に引られ赤井を信ふ  
滅さんこと先祖への不孝これ小過す下適き道ありて我死の  
覚悟しあふとも赤井の家名を興立らるるに解道もあふた小只  
一人の心より幾代の家譜を廢滅ささるる是下の罪根淺からば舊家  
絶きを匿くに傳來するたる重寶まぐ焼棄る赤井大中に朽て  
其故ら小断絶せん傳最朽滅ハ候もば也其分料もいこれに素小

波多野ハ信義を獨り思村よりあつた故も傳る不審さるを憚  
る色なく又縮らるる東をふどる海の赤井系遠も真摯に扱し  
て稍要時會ふる口も閉ざりしが條面を撲他と拍入小笑さるる者心  
中の鐵石もこれを碎くふそのあつらんといふ汝ハ説客に任  
に堪ふる人品あり今謂とそ汝の道理の始終吾肝膽をわく解と  
里忠いさりのあつた大丈丈の信義を守り此景遠汝が巧める言扱小  
ちのりなきいふ迷を取す古來相傳の家名を弁く波多野に  
力以勸するは不孝なりとの不審ハ理なきと會戦國の習例にして  
遠丹州も古來より國を國後興廢沈沈幾次り為といふも吾赤井  
家此之僥倖に表つるる是先祖より波多野家ハ信義を達し親  
く好む依るもなきなり然るも遠遭波多野一家滅田家に在せしるる



及人。丹波一國の弱兵軍會悉く降参。その弱兵と一様。乃翁村  
 ごと赤井家の名張汚し威を威し。臆病ありと噴き入や。一旦波多野と  
 盟約せし。泰山よりを極重し。昔日今先祖此誓を徒中。傳ふる奉  
 意。よ背くんこと。是ふ過ぐる不孝の何れ。嘆きあし。今赤井の  
 滅ぶる胸到來し。ぬる。其勢ふ。滅むんを。長く。法世ふ恥を。殘さぬ  
 以。潔ふ。我死して。義名を。未世。小傳ふ。ば。こ。ま。に。紙。する。思。考。あ。り。唯。遠。心  
 奥。決。して。愛。せ。ば。汝。存。び。古。論。を。道。と。相。の。根。固。く。言。動。は。根。固。か。り  
 に。感。嘆。か。り。勇。あり。義。あり。名。士。の。最。期。の。く。そ。ら。は。何。と。罷。り。死。遠。新  
 へ。ま。ご。の。ふ。せ。り。説。人。其。中。覺。期。を。听。ふ。法。を。て。念。換。たる。新。の。品。あり  
 遠。義。を。慥。へ。傳。せ。る。を。六。世。渡。の。望。今。く。是。り。ぬ。他。軍。と。あり。自。軍。と。あ  
 る。これ。私。の。遺。恨。ふ。あ。り。ん。歸。ふ。勇。士。の。本。意。を。遂。せ。る。と。餘。念。も

かけ小謂出。うり。系遠。こ。ま。成。熟。う。ち。聆。か。れ。と。我。場。の。他。軍。自  
 軍。へ。ま。に。は。由。る。忠。義。に。て。公。私。の。別。別。ハ。勿。論。なり。汝。と。我。と。仇。の  
 以。て。の。成。身。に。慥。ふ。こと。を。六。世。に。任。せ。得。た。り。し。思。材。を。暗。ま。と。聆。て  
 甚。肉。骨。の。別。の。品。あり。ん。頼。り。當。家。の。重。寶。たる。雌。雄。番。ひ。一。紙。に。筆  
 へ。下。す。期。の。我。死。ふ。落。し。讓。せ。る。人。ある。ふ。や。た。し。他。に。は。に  
 探。さん。こと。の。殘。り。憾。く。思。ひ。こ。ま。水。火。の。中。に。投。つ。る。人。然。る。ま。ま  
 を。歴。來。先。祖。より。傳。ふる。と。六。の。勇。義。も。消。失。せ。嫉。妬。の。汚。名。を  
 殘。さ。れ。る。吾。我。久。く。遠。寶。也。赤。井。家。に。ある。と。は。代。慕。懐。せ。り。是  
 を。讓。り。あ。る。へ。是。下。の。武。勇。赤。井。家。に。名。譽。を。傳。へ。其。英。名。に。類  
 里。く。乃。夫。も。亦。功。名。を。顯。せ。使。宜。に。を。さ。す。欲。は。可。望。の。む。と。我。稱。へ  
 る。も。其。報。恩。に。是。下。が。最。期。の。お。り。め。も。在。る。人。の。あ。る。大。事









赤井景遠  
最期よ  
のけんそく  
二の宝と潜ふ  
照政が許へ  
贈る





の赤井五郎家忠が第十歳なりたる稚子ふ。船の楫業を拮齋せ。之  
 士僅ふ一個を添く。宵門より送り出に。脇坂甚内康治ハ預く物せ  
 一符をかき。服居二個を情く地ふ當遣し。彼稚子を安撫らせ。我陣  
 中へ侍傍せ。最急切に命抱か。彼赤井ある船の軍を。後々傳史  
 せられ。むを。後々遣るまぐ。歎ひ鏡を。系遠が信義ハ屢々嘆し。其  
 後ハ敢く。眠も中ら。明天の軍を侍曉しぬ。

赤井景遠の義所殿甚内馬小西使者

周代鼎の江水に淪沈漢の洞人此瀾城小住。無情よく其徳不徳を  
 知く。然して面背を。今後ふ。赤井家の船の軍も。又然り。脇坂の  
 義勇に服せ。も忽ふ。永く其家の寶と成ぬ。其ハ周に曉さ。八月廿  
 六日。赤井悪衣の系遠ハ。後世の偉業。脇坂に侍課せ。り。され。今ハ

心小羅る事あり。片時も速く我死せ。と。城を破ら。兵將集ハ  
 酒酌會く。愉快笑ハ。川臨ハ。別離を。白帛日ハ。腫瘍を。軍  
 之。痛者せ。さ。も。厭ふ。今日。涯極と。兵。具。是。例。此。面  
 標。を。脊。骨。ふ。負。成。騎。の。肥。る。馬。小。西。軍。提。提。く。た。右。浅。瀬。願。願  
 とも。各。々。鏡。め。や。勇。め。鏡。令。い。る。若。我。ま。とも。歎。は。涙。を。着。せ。六。か。り  
 泣。取。せ。未。世。小。記。さ。る。か。先。く。進。め。と。一。聲。呼。び。圓。風。八。文。字。に。推。開。さ。  
 喊。を。作。り。と。段。段。以。惟。任。方。の。魁。之。の。諸。勢。是。を。視。る。より。其。に。これ  
 あ。を。出。せ。れ。船。の。皮。暴。殺。せ。ま。さ。く。怖。き。成。括。ら。か。と。動。搖。め。記。起。て。ふ  
 り。と。び。も。四。方。一。氣。と。崩。頽。たり。漂。行。と。な。る。系。遠。ハ。得。り。り。と。馬。を  
 駈。起。く。群。がる。歌。中。へ。瀉。て。投。里。面。背。頭。脚。の。擇。び。か。く。脊。力。に。信。せて  
 擲。起。難。伏。勇。を。奮。う。く。血。飛。以。遠。猛。風。小。懼。さ。怖。ま。二。個。の。志。も。近。づ





赤井景遠

七



赤井景遠

七



三得び厥ハ突破を接頼せし雷鳴を々々系遠が自勢を懸すた  
 里けをを極將の鞍下に弱車なく。哨方らと憤激を命涯限と  
 播くかど小惟任方の軍去軍必死の戈活に當得び右横た横小  
 礼を以て先秀怒を極を指揮す。聲を至有に懸す。けるふど  
 明智左馬助先後同治右傍の先忠。若田傳亮を殺して。巨津の勇士  
 激正魁に進で激水熾火の極威を顯す。遠城を殺果せびんは是も過  
 すと。浦小初す。懸まされ。砍起満伏するかと小死を究める城去軍。  
 数刻の軍に疲果。遠陽那丘小戦死す。五百餘人と所え。負殺も強  
 微に殺課され。大將系遠を建護の去へ。五六十個も過よりけり。然と  
 も赤井系遠ハ。今夫を最期の軍かれを一蹄歩退るを。殺聲  
 烈しく。棚と廻る。遠胸脇板基内ハ赤井と約せ。詞河りたれ。樂を

毆るあるが。と出城せし。殺す。大將悪右清の計を疎もせ  
 で觀護里在つも。實刻ががど愉快。最期の軍。伐逐させんと。機合を  
 窺ひ待りし。方僅ハ响を来りぬ。櫓に鎧。帯。絨。整。し。槍。を。鉾。長  
 に推拈す。一。拍。烈。しく。馬。勢。出。し。系。遠。的。目。で。弛。来。る。伐。悪。右。清。も。快。活  
 う。の。願。も。嬉。氣。に。亮。尔。と。共。ひ。羽。柴。此。勇。士。避。り。し。と。低。聲。小。呼。り  
 涉。里。合。他。交。も。せ。只。友。將。四。臂。の。双。風。順。逆。離。合。八。蹄。此。沙。の。卷。舒。反  
 覆。後。方。寸。分。者。ら。存。を。勝。敗。さ。ら。小。見。え。さ。り。し。を。勳。倒。り。と。悪。右。清。門  
 太。刀。投。弃。て。接。人。と。争。を。基。内。換。れ。も。と。馬。駢。憑。せ。友。聲。咳。と。抱。接。り。り  
 二。撞。三。撞。する。身。小。鐘。踏。裁。り。横。と。撞。其。响。も。や。系。遠。が。腫。病。破。き。く。血  
 煙。の。川。を。去。来。首。提。も。と。下。に。伏。を。脇。板。上。より。あ。が。り。有。係。小。心。哀。は。し  
 く。首。毆。り。く。猶。後。の。態。を。下。り。系。遠。聲。を。け。敵。を。壓。て。る。小。が。猶



豫以首を他人小謀さんたりと勵まされく氣を生盡し離情憾氣の  
 首刎願也。彼當標を脱取て再三志を伐推戴に保津城外の合戦小搦  
 坂基内康治が赤井悪右衛門を毆打たりと呼する聲小赤井は殘兵或の  
 守城の志士軍かりひくりに自殺して終に落城たりたり。是に依り  
 光秀ハ丹波一國を平均亦一脇坂等を搦磨一掃し。光秀秀右衛門方より  
 遠註伸を信長公精しく言伏まいらせし。かハ本年より約束ありと云  
 丹州六郡三十万石今ハ八万を色せ光秀は賜る實に真友の恩報にし  
 去。拔那の立身なれば君恩つ少く赤井とかり入置たり然ハかくて心中大  
 以信長を怨む情なれば大將ありと密に譚話亦ともありたるを備亦搦磨  
 の探題藏羽柴筑前守秀右ハ平山の誠小在任して別所家臣代保  
 略を後之夫一在りける。丹波一國平均と云別所のと云に翼を失

小ひ之本城近日に滅亡せんと時を論ひ速等たり。差小備前津田  
 和泉守直家ハ去ぬる年ト云東西の織田先利の蹊蹊を論ひ強弱を試て在  
 たりしが。上月鏡の始終といひ秀右数度の軍方尋常ありぬれにわろ  
 以草樹も靡く威風に云々。丹州の軍も九分ハ降服せしむどにたて  
 も右とも羽柴ありてハ恃據を人外にゆじと心成決して織田方に降  
 参を遂家國を全ふせをやと懐ひ起。家は哀れく評説せしに。余その  
 一議に歸りたる由也。誰をのり信長ハ使士と云して調投へし譚を  
 時境差小備前墨山の高夫魚屋孫九郎といふのあり。平日浮田家  
 へ出入りて軍用金かと調達したるが。家小男子はあつたれ。泉別認の  
 小西如清といふ者の子を乞ふる養子と云。名實讓りて孫九郎と  
 歸させ。今年廿一歳あり。強氣にして力強く面白くし。品美く。其



態匹夫ともんえざるが腰辨舌利口ふくま法も亦練磨せり心相賢  
 死由名平日に武士と交情をれを應對万詞の起居般しく東西熟た  
 る仕士あり。上方武士の行状も頼す。案内知たまはこを浮田家の  
 信家と稱らせ使者たりしめんと緯定す。而時小魚屋浮九郎茂呼  
 倚せ直家より何り使節の詞を彼浮九郎に命す。も衣服大小此類  
 を脱し小面浮九郎と名改革させ。掃磨なりたる羽柴陣一從者率せ  
 ると急せせらる

繪本豊臣勲功記五編卷之一終



